



本業を通じた貢献

特集

次代の成長を創る

～産学連携で育む、10年後の収益基盤～

10年後の収益の柱を生み出す ―

そんな使命を掲げ、2022年にわずか3名でスタートした新規事業づくりの挑戦は、大学などとの連携を積み重ねながら、今では「資源循環」「環境農林水産」「電磁気」という3つの分野へと絞り込まれてきました。当社が長年培ってきた樹脂材料の配合加工技術を基盤に、産学連携を通じて新たな事業機会の創出に挑戦しています。地球規模の環境・社会課題の解決を見据え、既存の強みを活かしながら未来への種をまき続ける新規事業創造部長が、その歩みと将来への想いを語ります。

エグゼクティブフェロー
新規事業創造部長

田坂 道久

新規事業創造部の目指すもの

私たち新規事業創造部が目指しているのは、2030年代のリケンテクノスグループを支える新たな収益基盤を創出することです。既存事業で培った素材技術と事業化ノウハウを活かしながら、社会課題の解決と企業価値向上の両立を目指しています。

今、地球規模で環境や社会の課題が複雑化しています。国連やIPCCが提唱する「プラネタリー・バウンダリー」、地球環境には持続可能な活動の限界があるといわれています。私たちは、化学メーカーとして、素材メーカーとして、こうした地球規模課題の解決に貢献できる事業機会を探索しています。

同時に、この部署にはもうひとつの大切なミッションがあります。それは「チャレンジメーカー」として、新しいものを生み出す企業文化を、私たち自身が体現していくことです。既存の事業の延長線上だけでは見えてこない未来の柱を、外の世界とつながりながら、じっくりと育てていく。それが私たちの役割です。新規事業というと、華やかな成功だけが語られがちですが、実際には長い時間軸で地道に種をまき、育てていく仕事です。今日ご紹介する取り組みの多くも、まだ芽が出たばかりの段階にあります。それでも、一つひとつの挑戦を積み重ねていくことが、未来の当社の姿を大きく変えていくと信じています。

設置の背景にあった危機感

新規事業創造部の前身である新規事業開発準備室は、

2022年10月に発足しました。その背景には、ひとつの危機感がありました。当社には「熱可塑性エラストマーコンパウンド」という大きな成功を収めた事業がありますが、それに続くような新しい事業の柱がなかなか生まれていなかったのです。

市場や投資家の皆様からの期待は、年を追うごとに大きくなっています。当社が持続的に成長していくためには、既存事業だけに頼るのではなく、新たな収益の柱を自らの手で育てていく必要がある。そうした問題意識のもと、3か年の中期経営計画という短期的な枠組みを超えた、長期の成長戦略を担う専門部署として、この組織はスタートしました。社長直轄の部署として大きな裁量を託していただいたぶん、身の引き締まる想いで取り組みを始めたことを覚えています。

立ち上げ期の困難と挑戦

準備室が発足した当初は、わずか3名からのスタートでした。何をテーマにするのか、どの分野を狙うのか、すべてが白紙の状態です。まずは世の中の動向を調べるところから始め、少しずつ分野を絞り込んでいきました。

もうひとつ、当社にとって大きな挑戦だったのが産学連携です。これまでの当社は、徹底した合理主義のもとで事業を進めてきた会社であり、大学など外部の研究機関との連携にはあまり積極的ではありませんでした。ただ、5年後、10年後を見据えたときに、自社の知見だけでなく、アカデミアの持つ理論や技術、そして発想を積極的に取り入れていくことが不可

欠だと考えるようになりました。そこから一つひとつ連携先を増やしていき、今では20を超える産学連携のプロジェクトを抱えるまでになっています。

テーマを選ぶ過程では、正直なところ、かなり悩みました。既存事業の延長線上にあるテーマであれば、それは既存の開発部門が担うべきものです。かといって、あまりにも当社の事業からかけ離れたテーマでは、なぜ私たちがそれをやるのかという説明がつきません。「近すぎず、遠すぎず」という言葉にすると簡単ですが実際には非常に難しいバランスを、アカデミアとの対話や学会、シンポジウム等に足を運びながら、試行錯誤を重ねて探ってきました。この試行錯誤の末にたどり着いたのが、「資源循環」「環境農林水産」「電磁気」という3つの分野です。

そして2026年4月、これまでの探索の成果を踏まえて、準備室は新規事業創造部へと改編されました。人員も拡充し、テーマを探索フェーズから、事業化を見据えて一歩踏み込むフェーズへと進化しています。何を狙うべきかを模索していた時期を経て、狙うべきテーマが明確となり、事業化を見据えた体制が整いました。

振り返ってみると、この数年間はまさに種をまく時期でした。何も生えていない土地に、どんな種をまけば芽が出るのかをひとつずつ確かめてきたようなものです。時間はかかりましたが、その分、しっかりと根を張ったテーマにたどり着いたのではないかと考えています。

3つの重点分野と、その取り組み内容

先ほど触れた「資源循環」「環境農林水産」「電磁気」は、最初からこれらの分野を狙っていたわけではありません。世の中の動向を見極めながら、有望なテーマをひとつずつ検証していくうちに、気がつけばこの3つに自然と集約されていました。誰もまだ本格的に取り組んでいない、けれど社会的な意義と成長の可能性を感じられる領域を選んできた結果です。それぞれ、今どのようなことに取り組んでいるのかを簡単にご紹介します。

資源循環の分野では、使用済みのプラスチックを新たな形で有効活用する技術に取り組んでいます。当社が祖業として長年扱ってきたポリ塩化ビニル（PVC）を中心とした循環技術により、使用済み資源の高付加価値化を目指しています。将来的には資源回収プロセスやリサイクル原料の事業化も視野に入れています。

環境農林水産の分野では、自然界に存在する共生菌の活用により、環境再生と一次産業の生産性向上の両立を目指しています。海や土壌、あるいは畜産や養殖の現場で、微生物の力を借りて環境を整えていく。そうした自然の仕組みに学びながら、微生物技術と樹脂材料技術を融合させ、環境再生やブルーカーボン形成支援、持続可能な一次産業への貢献を目指しています。

電磁気の分野では、水処理や環境浄化領域に焦点を当て、光・磁気を活用した次世代インフラ技術の社会実装に取り

組んでいます。薬剤に頼らず、光の力で水をきれいにしていく。エネルギーの負担を抑えながら社会インフラを支える技術として、期待を寄せています。

それぞれの分野に共通しているのは、当社がこれまで培ってきた樹脂素材の配合加工技術や、開発から量産化まで一貫して対応できる事業化のノウハウを活かせるという点です。まったく畑違いのことに挑戦しているようで、実は既存の強みとしっかりつながっています。

こうしたテーマの多くは、当社単独で一から生み出したものではなく、大学やスタートアップ等、外部の研究者の皆様との対話の中から生まれてきました。専門的な理論やメカニズムの理解を深めてくださるアカデミアの力と、それを実際の製品やサービスとして形にしていく当社の力を掛け合わせることで、一社だけでは決してとり着けなかったであろう領域に踏み込んでいると感じています。

企業価値とのつながり

株式市場における当社は、これまで「プラスチック加工銘柄」「フィルム加工銘柄」として見られることがほとんどでした。しかし、新規事業の取り組みが徐々に形になってきたことで、投資家の皆様からの視線にも変化の兆しが出てきています。

実際、これまでは業界専門紙にしか取り上げていただけなかった当社の取り組みを、最近ではより幅広いメディアで紹介していただく機会が増えてきました。これは、当社に対して新しい関心を持ってくださる方が増えている証だと感じています。

当社が持続的な成長を実現するためには、既存事業の競争力強化に加え、将来の収益基盤となる新規事業を育成していくことが重要です。新規事業創造部では、技術シーズの探索にとどまらず、事業性評価や実証を通じて事業化の可能性を見極めながら、収益化に向けた取り組みを進めています。しかも、これは既存事業と切り離された話ではありません。

素材の配合技術や、大学との連携で培った知見、そして事業化のノウハウは、既存事業とも重なり合い、互いに強め合う関係にあります。新規事業への挑戦そのものが、既存事業の技術力や組織の活力を底上げすることにもつながっていくはずです。

どのテーマにどれだけの経営資源を投じていくかは、将来の市場規模、収益性、事業化時期を踏まえた経営判断によるものです。私たち新規事業創造部は、探索研究から実証、そして事業化へと段階的にテーマを進化させる役割を担っています。現在推進している各テーマはまだ事業化前の段階にありますが、技術実証やパートナー連携を通じて事業性の検証を進めており、将来的な事業化と収益貢献を見据えた取り組みを加速しています。

社会への貢献と今後への想い

上場企業として、事業を通じて利益を生み出し、株主の皆

様に還元していくことは当然の責務です。ですが、それと同じくらい大切にしたいのは、社会が抱える課題の解決に、技術を通じて貢献していくことだと考えています。資源循環にしても、環境再生にしても、水処理にしても、私たちが取り組んでいるテーマはどれも、今の社会が向き合わなければならない課題そのものです。

現在は探索研究から実証フェーズへ移行する段階にあり、一部テーマについては事業化に向けた検証を進めています。今後は市場性や事業性の評価を進めながら事業化の可否を判断し、産学連携を通じた探索と事業化の取り組みを着実に進めていきます。

当社では新規事業を将来の事業ポートフォリオを支える成長ドライバーのひとつと位置づけています。複数のテーマにおいて、2030年代の社会実装と収益貢献を見据えながら、次なる成長の柱となる事業の創出につなげていきたいと考えています。

共同研究事例 ① 廃棄されるはずだったPVCが、希少金属を取り戻す力に

電気自動車やスマートフォンのモーターには、強力な磁力を持つ「ネオジム磁石」が使われています。この磁石には、ネオジムやジスプロシウムといった希少な金属が含まれており、供給が特定地域に偏っていることから、使用済み製品からいかに回収し、再利用していくかが世界的な課題となっています。

当社は、島根大学と共同で、この希少金属の回収技術に関する研究に取り組んでいます。着目したのは、同大学が開発した「湿式メカノケミカル処理」という技術です。無機酸を用いて固体の廃棄物から特定の資源を選択的に取り出す手法で、ネオジム磁石から希少金属を高純度で回収できることがわかっていました。ただし、磁石を溶かすために大量の強酸が必要となり、使用後に残る酸（廃酸）の処理に手間とコストがかかるという課題がありました。

そこで私たちが着目したのが、当社が長年扱ってきた

PVCという素材の性質です。PVCは、外部からエネルギーを加えると、塩化水素、つまり酸を発生する性質があります。この性質をうまく利用できれば、廃棄されるPVCを、希少金属を回収するための酸の発生源として活用できるのではないかと。そう考え、共同研究を進めてきました。

実際にPVCの分解反応とこの回収技術を組み合わせることで、新たに強酸を加えなくても、必要な分だけ酸を発生させながら希少金属を回収できることを確認しました。廃酸の発生量を抑えながら、PVCの有効活用と希少金属回収を同時に実現できる可能性があります。2026年3月には学会でもこの成果を発表し、業界からも高い関心を集めています。

電動車市場の拡大に伴い、レアアースの安定確保は重要性を増しています。本技術が、資源循環型社会の実現に向けた新たな選択肢のひとつになることを期待しています。

共同研究者コメント

共同研究を通じて印象深いのは、廃棄されるはずだったPVCを新たな酸の供給源に変えるという発想が、アイデアを交換する中から生まれてきたことです。使い道のないPVCと、同じくリサイクルが必要なネオジム磁石とを組み合わせることで、原料コストを抑えながら双方の資源循環を同時に前進させられる。この相乗効果の大きさに、今後の可能性を感じています。

大学の研究はどうしても小さなスケールにとどまりがちで、それを実際の設備やプロセスとして形にしていく段階には、大学だけでは踏み込めない難しさがあります。事業として成り立たせる視点を持つ企業との連携があってこそ、その壁を越えて実装への道が開けると実感しました。また、成果を積極的に公表してよいという許可をいただいたことは、学生にとっても社会の課題解決に取り組んでいるという実感につながり、研究への大きなモチベーションになっています。今後はPVCのリサイクルとネオジム磁石からの資源回収という二つの流れを両輪として動かしながら、将来的には大きなコンソーシアムを形成し、国全体を動かすような展開まで描けたらと考えています。



島根大学 教授

さ さ い り ょ う

笹井 亮 様

共同研究事例 ② 水をきれいにした後、光触媒を磁石で回収する

薬剤を使わずに水をきれいにする技術として、光触媒による水処理が注目を集めています。光を当てただけで水中の有機物を分解できる、環境負荷の低い技術ですが、処理後に触媒の粒子を回収することが難しく、実際の現場で使うには課題がありました。

この課題に取り組むため、当社は新居浜工業高等専門学校と共同研究を進めてきました。同校が長年培ってきた光触媒の研究知見に着目し、当社が持つ素材の配合加工技術や量産化・事業化のノウハウを掛け合わせながら、実用化に向けた開発に取り組んでいます。

そうして開発したのが、酸化鉄の磁性粒子を多孔質の素材に担持させた、新しいタイプの光触媒材料です。この

共同研究者コメント

共同研究を通じて、検証のスピード感が大きく変わりました。私たちだけで少しずつ進めていた研究が、企業との連携によって驚くほど加速し、次元の違う速さを実感しています。毎回きちんと目標を定めて打ち合わせを進めてくださるので、次にやるべきことがどんどん明確になっていくのもありがたいです。何より嬉しかったのは、学生の研究が社会の役に立つ本物の技術なのだと思感でき、モチベーションが大きく向上したことです。高専で学ぶ学生たちに、自分たちの研究が本当に社会とつながっているのだと伝えられる、大変貴重な機会をいただきました。



新居浜工業高等専門学校

准教授

ひらざわ ひでゆき

平澤 英之 様

講師

さかもと まさのり

坂本 全教 様



新居浜工業高等専門学校

きむら はるか

木村 遥 様